

## 令和元年度卒業式式辞

穎明館第 33 期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。保護者の皆様、心より、お祝い申し上げます。

本日は、学園本部から理事長の堀越正道先生、副理事長の堀越由美子先生、堀越高等学校校長の勝又宏先生を迎え、またご列席の保護者・教職員・吹奏楽部員・代表生徒の皆さんとともに、卒業式を挙げることを誠にうれしく思います。

今回、感染症対策の社会情勢を考慮して、政府の休校要請を受けた対応をとり、卒業式についても規模を縮小し、高校生全員を同席させることは控えました。それでも、在校生の祝福の気持ちは、私たちとともにあると信じております。

6 年前、まだ子どもっぽさがぬけきらず、あどけなく小さかった第 33 期生の皆さんが、今、堂々と立派に大人としての一步を踏み出そうとしている姿に、私は感動を覚えています。穎明館での 6 年間の学校生活、皆さんは本当によく頑張りました。数々の **Experience**・経験を積み、**Morality**・道徳性を育み、**Knowledge**・知識を身につけて大きく成長してきました。まず、私はそのことに敬意を表し、感謝したい。もちろん皆さん一人ひとりも、それぞれの 6 年間を支えてくださった保護者・ご家族、導いてくれた先生方、ともに頑張ってきた仲間、先輩や後輩など多くの方々への感謝の気持ちを忘れずに、こういう人生の節目の日にきちんと言葉でその感謝の思いを伝えてほしいと思います。「おめでとう、ありがとう」をお互いに笑顔で交わしてください。

さて、今日は穎明館第 33 期生の皆さんに卒業のはなむけとして、一つの言葉を用意してきました。「**noblesse oblige**」、高貴なるものの義務、もてる者はそれに応じて果たさなければならない社会的な義務や責任があるという欧米社会の道徳観を示す言葉です。例えば、イギリスでは第一次世界大戦の時、戦没者の割合が最も高かった士官は、オックスフォード、ケンブリッジの卒業生だったそうです。彼らは進んで危険な最前線に立ちました。第二次世界大戦ではエリザベス 2 世が、また 1980 年代のフォークランド紛争でもアンドルー王子が、イギリス軍に従軍したことも有名です。一方、アメリカ合衆国では、セレブリティや名士が、ボランティア活動や寄付をすることは一般的なことです。自分が成

功したのは、また強くなれたのは、それに至るまでの多くの人間の助けがあったからだ、という意識を育てる文化や伝統があるからでしょうか。しかし現代日本にも、ノブレス・オブリージュを思い起こさせる人はいます。今、私が思うのは、昨年、亡くなられたお二人、難民支援に尽力した緒方貞子さんとアフガニスタンで用水路を建設してきた医師の中村哲さんです。それぞれお亡くなりになられたときに、読売新聞、朝日新聞に掲載された評伝記事を抜粋して紹介します。

まずは緒方貞子さんについて、読売新聞の評伝記事から。

「 2000年3月、UNHCR トップとして最後となった緒方さんの旧ユーゴ視察に同行した。まだ紛争の爪痕が生々しく残るでこぼこ道を何時間も四輪駆動車に揺られ、お湯も出ない宿を転々とした。家族や生きる糧を失い、対立する民族を非難する住民の話に根気よく耳を傾けた。

コソボでのスタッフ会議。資金も人手も足りないと訴える職員に、緒方さんは「何ができないかではなく、あなたに何ができるかを教えてちょうだい」と応じた。淡々とした口調だったが、会議の空気が一変し、そこから議論が建設的になった。現場第一主義をモットーとした人道支援活動を支えた原動力は、持てる者には社会的責任が伴うというノブレス・オブリージュだったのでろう。」

続いて中村哲さんについて、朝日新聞の評伝記事から。

「 2000年にアフガンが大干ばつに襲われ、清潔な水と食糧があれば治る病気でも亡くなる人が急増すると、「とにかく生きておれ。病気は後で治す」と、飲料水確保のための井戸を掘った。用水路建設は2003年から。土木を独学して図面を描き、自ら重機を運転した。現地の人たちだけでも維持・管理できるようにと、伝統的な技法を採用。取水堰は、江戸時代に築かれ、今も使われている山田堰（福岡県朝倉市）をモデルにした。「医学部を卒業したころは、アフガンで河川工事をするとは想像もしていませんでした」。

「復興は軍事ではなく農業から」との信念のもと、近年は国連機関や国際協力機構（JICA）とも連携し、ノウハウをアフガン全土に広めようと考えていた。73歳だった中村さんは「あと20年は活動を続ける」と周囲に語っていた。無念さはいかばかりか。」

卒業生の皆さん、どうですか。緒方さん、中村さんに共通しているのは、解決が難しいと思われる問題に、時間をかけて現場で努力を重ねたことだと思います。そして、文化や宗教が違っていても、やるべきことは苦しむ人たちを救うことだという情熱。世界はつながっていて、自国だけの平和や幸福はあり得ないという信念。持てるもの、恵まれた環境にあるものこそ、その責任を果たすというノブレス・オブリージュを、まさにお二人は体現されていたのだと思います。

穎明館の教育目標は「国際社会にはばたく真のリーダー育成」です。昨年卒業の第32期生まで、すでにおよそ5000人もの卒業生が、世のため、人のために貢献できるリーダーとして活躍しています。第33期生の皆さんも、それぞれのかげがえのない命を大切にしながら、「ノブレス・オブリージュ」を胸に、国際社会でどうか大きくはばたいて行ってほしい。そのためにまずは大学という学問研究の場で、さらに自分自身の知性に磨きをかけて行ってほしいと思います。皆さんのこれからに大いに期待しています。

式辞の結びは、創立者堀越克明先生の定めた校訓です。2011年、お亡くなりになる直前に、50年後、100年後の穎明館生のためにということで定めていただいた、まさに創立者の遺言のようなものです。穎明館から旅立つ卒業生の皆さんとともに味わい、かみしめたいと思います。

「 人生は何ごとに依らず                    その目標は高く設定すべきである  
その推進には                                高い知性と理性を必要とする                    」

穎明館第33期生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんの人生に幸多かれ。

以上、令和元年度穎明館高等学校卒業式式辞といたします。